

アンリ・セアール『海辺の分譲地』について

田 辺 純 夫

アンリ・セアール『海辺の分譲地』(Henry Céard: Terrains à vendre au bord de la mer) が出版されたのは 1906 年のことである。ゾラの『メダンの夕べ』に『刺絡』(La Saignée) を発表したのが 1880 年、自然主義小説の傑作としてゾラに褒められた『佳き一日』(Une belle Journée) が 1881 年だったから、最後の小説となったこの作品が書かれるまで随分年月が隔たっている。

パリ・ファスケル出版の『海辺の分譲地』は 775 頁 (1 頁に 44 行) に達する膨大なものである。苦心のあとが偲ばれる的確な比喻や細密な描写など、部分部分に作者の感性のきらめきを感じとれるが、全体的にはなんとでも冗長で散漫な印象は否めない。中心になるべき筋がはじめは中々見えてこない上、その進展も情熱的なドラマのように勢いよくはゆかない。しかしそのような欠点を補っているのが、舞台となったブルターニュの田舎風俗の研究と——事実、Événement 紙に掲載 (1905 年 5 月～11 月) された時は Roman de moeurs としてだった——見して自然主義に反する幾つかのエピソードによるロマネスクな色どりである。

さて、平凡な中年男女の気の抜けたランデヴーを描き、ゾラに『^{ポエジー}詩も感情も面白味も、何も、何も、全く無い。万歳!』と言わせた『佳き一日』とは異なり、甚だ中味が盛り沢山の『海辺の分譲地』には、自然主義の生き残り作家セアールのどのような思いが込められているのだろうか。出来るだけ詳細に内容を追ってゆきたい。

☆ ☆ ☆

物語の大筋は次のようである。

ブルターニュ半島の一つの先端にある Kerahuel という名前の村。鰯漁で多忙だったために 10 日ほどおくれて、7 月 14 日の祝賀行事が行われている場面から物語が始まっている。

批評家でジャーナリストのアンドレ・マルバルは、パリを逃れて静養しながら『科学と文学の関係について』と題する著述をすすめるために、この地でホテルとは名ばかりの民宿に滞在している。登場人物の変わり種には、先祖にアルコール中毒患者のいる宿無しの若者バリュシュ、大酒呑みで刑務所帰りの大柄な中年女マル＝コモードがいる。それからマルバルの散歩のお供をする、以前は夏の間は貸し犬だったシャン・ド・ヌー。

村長ラシンプールは、Kerahuel を Malo-les-Bains や Trouville に負けない海水浴場にして富と進歩を村にもたらそうと意気込み、海辺の村有地には Terrain à vendre の立て札が並んでいる。

男たちは年中殆ど海に出ている。漁業以外にこれといった収入の無いこの村の女たちは、夏には鉄道の駅前で「漂流物にしがみつくと難破者のように」汽車を降りた宿泊客を奪い合う。しかし、元来排他心が強い土地柄であり、“よそ者” からしほり取るばかりで歓待しないので、Kerahuel の評判は甚だよろしくない。村長は立て札を塗り直したり倒れたのを起こしたり、ケルト祭など海辺を賑わす催しも行われたが、分譲地はさっぱり売れないのである。そのために、駅から海岸への直通路路は開通済みだが、海岸に大通りを作る計画は中断している。

マルバルがパリの新聞に送った文章『トリスタンの国にて』を目にした歌手トレニッサン夫人が——ワグナーの『トリスタンとイズゥ』でイズゥ役で歌って盛名を馳せた——Kerahuel に憧れてやって来て、マルバルと再会する。そしてマルバルに案内されて海辺を散歩するうちに、二人の間に過ぎし日の愛が

よみがえる。ワグナーの音楽を通してブルターニュの海の眺めに陶酔した彼女は、マルバルが“トリスタンの城”と呼ぶ重畳たる奇岩の真向いに分譲地を買って家を建てる決心をし、ワグナーの劇にちなんで Keréol 荘と命名する。

村人には知られていないが高名な解剖学者のラゲピーは、求められれば田舎医者役も果たし、彼らの身体だけでなく精神状態も観察しつづけている。魚の研究もするラゲピーが漁法の改善をすすめたこともあるが、古くからの慣習にすぎない閉鎖的な人たちは聴き入れようとしない。

イヴォールという水先案内人が——彼は近頃めっきり仕事が減ったのを嘆いている——自分の娘を刺して重傷を負わせる。傷の手当をしたラゲピーが絶対安静を指示したのに、中世伝来の療法を行なうアステリーという女が司祭を連れて来て怪我人の身体を動かして死に至らせる。またラシンプールの政敵ブリーニャが心臓発作で倒れた時、眠らせるためにモルヒネを注射したラゲピーが毒物を使ったとして追っ払われ、司祭の終油の儀式とアステリーの我流の治療とで生き返り——モルヒネから目がさめたのだが——近代医学は敗北し、ラゲピーは村人の敵にされてしまう。ラゲピーは二度と診療はしないことにし、彼らに対する科学的復讐を心に誓う。

Keréol 荘の工事が進むうちにトレニッサン夫人は、海の眺めの美しさにおよそぐわわない外来者に対する人情の酷薄さ、特に富裕な女性への妬みと憎しみを思い知らされる。マルバルの方も、「新しい風景に新しい思想を」見出そうとした期待が裏切られ、著述も遅々として進まず、文学を科学に調和させようという考えも斬新性が失われる。イズゥをいま一度パリで歌う機会を得た夫人も今度は成功を博することが出来ない。ワグナーを歌う先駆者の役割はもう終っていたのだ。こうして学問にも芸術にも支えを失った二人は Keréol 荘での共同生活のうちに結ばれ、トレニッサン夫人は妊娠する。

結婚ではない共同生活に対して、自分たちの売春や姦通には寛大な村の女たちから、偽善的な非難が浴びせられる。その上、Keréol 荘の庭で生まれたばかりの赤子の死体が発見されるや、夫人は子殺しの疑いまでかけられ、押しかけた群衆の投石でマルバルの書齋の窓ガラスが割れる。身の危険を感じた二人

は夜半に Kerahuel を脱出してパリへ帰る。Keréol 荘の売却広告が新聞に出る。二人の結婚。男児出産、そしてトリスタンと名づける。マルバルの原稿料も安くなり、夫人は芸術を職業に代えてアメリカ巡業もするが、パリのキャフェコンセール風の芸は喜ばれても夫人の歌は鉄道王や石油王たちにはさっぱり受けないのである。

一方 kerahuel では、村長と村会議員の改選期を迎え、ラシンブールとブリーニャの間ですさまじい買収合戦が展開され、不正投票も堂々とまかり通る。愛人のマリエットが Kerahuel から去ったことを知ったラシンブールは、選挙に勝ち目が薄いと察してか、未だ投票時間が終わらないうちに唐突に村長職を放棄する。

新村長らの手で“Terrain à vendre”の立て札が引き抜かれて海に投げ捨てられる。ところが村有地と思われていたのが実は一個人の所有地だったことが判明し、その場所へサナトリウム建設の話が持ち上がる。産業の無い土地では病気は金鉱たり得るか？病人に良い空気は金持ちにも良いだろうか？議論がたたかわされるうちにはじめは反対していたブリーニャが賛成にまわり、ラゲピエも参画した300人の病気の子供を収容するサナトリウムが建造される。ところが工事用資材も労働者も他所から調達されたために、あてにしていた経済効果が殆んどあがらない。そして、Kerahuel の閉鎖性、非近代性に勝利したサナトリウムだが、予期しなかった困難に早くも直面する。それは波による海岸の侵食である。

或る万霊節の日、マルバル夫妻はこの地方を通りがかりに Kerahuel に立ち寄った。打ち寄せる波は砂浜をどんどん削り取って、サナトリウムまで50メートルの所まで迫っている。科学の勝利の象徴だったサナトリウムは、今度は自然の力に対していつまで持ちこたえられるのだろうか。そして、あれほど二人が愛でた“トリスタンの城”も見る蔭もない変わり果てた姿になっていた。まるで二人の夢の挫折に符合するように。聞くところでは、バリュシュは徴兵でアルジェリヤへ送られる途中で失踪し、マル＝コモードは子供たちに「見せてはいけないものを見せた」かどで牢に入っている。老衰のシヤン・ド・ヌー

は二人の呼び声を聞いて死んでいった。

人々は死者への祈りを捧げ、花を海に投げて供養する。霧の中で声がくり返す、

死は汝が伴侶、死は汝の身の内にあり。

波間に漂った花はひとつひとつ溺れて沈んでゆく。マルバル夫妻は泣きながら激しく抱き合う。

☆ ☆ ☆

マルバルとトレニッサン夫人が散歩の途中で見た家には窓が無かった。窓税を免れるためである。真暗な家の中から、海で死んだ夫のためにお祈りをする女と、幼い女の子の唱和する声が聞こえてくる。二人は今わかったのだ。自分たちが波の美しさに見惚れている間に沖では漁夫が遭難し、未亡人と父親のいない子供が出来ることが。Kerahuel に男の墓が少ないことが海難の多いことを物語っている。無知なために羅針儀の見方を知らず、およその見当で操船して進路を間違えたり、暗礁の状態を知らぬために起こる事故も少なくないという。

男たちが遠くの海にいる間に妻は酒びたりになる。「家にあるすべてのもの、牝牛の乳からマットレスの馬尾毛まで、亭主が置いていった衣裳たんすまで」飲まれてしまう。母親が飲むと娘も見習って飲むことを覚える。ラゲピーによると、「遺伝的条件においてはほんの些細なきっかけが大酒飲みの女を作る。」夫から妻へ、妻から娘へと、Kerahuel では飲酒が蔓延している。小間物屋までがこっそりと酒を売っている有様だ。

村では海藻を焼いて肥料を作るぐらいしか仕事が無い。そこで夏には民宿業に精を出すのだが、生活水準が低く衛生状態も悪い村なので都会人には居心地の良からう筈がない。それのみか物の値段も労賃もつり上げる。頼まれた洗濯物もきれいにしない。ケルト祭の終わったあと、芸人たちと泊まった家の人との間で金銭上のトラブルが起こった時、「陸の上で盗賊たちの餌じきになるよ

り、メデューズの筏の上で自分たちの間で食い合いをした方がまだましだ。」と喜劇役者たちが言ったほどである。“よそ者”から利益をむさぼるのはなにも今に始まったことではない。昔、この村人が牛の角に提灯を結びつけて沖の船に進路を誤らせ、海岸に衝突させてその漂流物を盗んだこともあったという。

旅行者が来ない時は軍隊が標的にされる。時々 Kerahuel の近海へ軍艦が訓練にやって来る。女たちは軽舟で艦の舷側に近づき、菓子やいちよう蟹や飲みものや野菜を売る。海軍が来そうだとすると沢山の玉子が貯えられる。高値で売れさえすれば、腐った玉子やいたんだじゃがいもを売りさばくのもっと軍艦が来て欲しい。そして、水兵が上陸すると何事が起こるかは言うまでもない。

無知でも貧乏でもない階層の人たちも、自分たちの目論見や野心の実現に余念がない。ラシンプールにとって代わろうと執念をもやすブーリニャは酒の卸商人で、開業資金を貸し付けて小売商人をふやし、借金でしばりつけて自分の意のままに従わせようとする。今ではラシンプールの愛人であるマリエットはマルバルにこう告白する。「女は各駅停車 (train omnibus) のようなものよ。着く (arriver) のに時間がかかるし、沢山の駅に止まるわ。でも今では私、女城主なの。」彼女は男遍歴で成り上がり、Kerahuel から 10 キロ離れた古いシャトーに住んでいる。或る夜、彼女が村長にインチキのくじ引きで当ててもらった分譲地の上空に、光り輝く十字架が出現して売地全体を五分間も照らし続けた。超自然的なものの出現でワールドが繁栄したように、Kerahuel の発展のために彼女がバリの花火師に頼んで爆発物を打ち上げてもらったのだった。

ラシンプールとブーリニャの選挙戦は熾烈だった。海から帰った漁夫たちは公然と飲み代を要求した。ラシンプールが通りを歩くと、或る者はパンを、また或る者は口利きを求めた。子供たちが村長の家の前でラシンプール万歳！と叫ぶと、気を良くした男は 2 スー貨を掴んで窓から何度も投げ与えた。ブーリニャは酒に代えられるボール紙のお金まで考案した。アルコール類の販売量が

いちじるしく増加し、それを二人が払うのである。ラシンプールの急死を祈願するミサを上げてもらおうとしたが、さすがにこればかりは司祭が断った。どちらの候補の支持者も二枚舌を使って両方から利益を得た。裏切りも悪意も、「人々が吸う腐った魚の匂いのする港の空気と同様にごく自然なこと」に思われている。ラゲピーが普通選挙の墮落ぶりを検証するために敢えて投票場の立会人になり、フランスのどこでもこんな違法行為は許されない、と面詰するとラシンプールは次のように答える。「フランスだったら、したいようにすればよい、フランスだったら。でもここはブルターニュだ、だから、^{せいこみんがさ}こうなのさ。」

《C'est comme ça.》それは「この土地ですべての合理的な思想に反対する言葉」「新しいことへの恐れを正当化する言葉」であり、Kerahuel を歓待と社交の場にしようとする現村長を悩ませてきた言葉でもあった筈である。ところが今度は自分の違法行為を正当化するために、野蛮な慣習の味方であるこの言葉を楯にとる始末なのだ。マルバルがはじめに郵便局でブルターニュ衣裳の女性局員の応対ぶりに立腹した時、返ってきた言葉というのが《Parce que c'est comme ça.》だった。ブルターニュの女の衣裳や髪形、つまり“よそ者”の眼を楽しませてくれるピトレスクな地方色に、どれほど高い代価を支払わせられることになるのか、まだその時は思いも及ばなかった。また、パイロットの娘を死なせてしまった責任を問われると、アステリーは《Parce que c'est comme ça.》とラゲピーに答えたものである。いま一度ラゲピー医師の言葉を聴こう。「その言葉は至るところから立ち昇り、漁業や農業の新しい方法に反対した。陸上でも海上でも発明や発見に反対した。それは人々の善意に立ち向かい、科学を受けつけない。」

☆ ☆ ☆

マルバルの眼には「傷ついたトリスタンが身をひそめ、イズゥを連れ帰る船を待っていた処」として映る“トリスタンの城”は、実際は非常に散文的な場

所なのである。或る時、その奇岩の高さに「大きな波が奇怪な形のを浮かべていた。茶褐色の背中、途方もなくふくらんだ白い腹が現れ、宙に上げた脚、動物の鼻面、一對の角が見分けられた。」それは、家畜を積んだ船が難破しそうになったので、海に投げ棄てられた積荷の牛だった。「沖は溺死し、荒れ狂う嵐の大揺れに躍る牛でいっぱいになった。」結婚披露宴の時以外に牛肉の切り身を食べた覚えのない人たちに、この漂流物は「未知の底から海に運ばれて彼らの許に届いた思わぬ授かりもの」だった。その肉は塩漬けにされて冬の御馳走に保存されたのである。

“トリスタンの城”はまた、罪を犯した者の隠れ家にされることもある。5年前に列車内で人殺しをして逃走中の謎の人物パスカル氏がここに身をひそめている。娘を刺したパイロットもここへ逃げて来たが、彼はパスカル氏の目前で逮捕される。それでパスカル氏は自分の犯行を思い起こす。鉄道での殺人。事前に借りた家に潜伏。大臣の私生児なのでうやむやに終わった捜索……。里心づくど彼は岩の間から出て、駅で列車の出発を見送ったり、イベントで賑わう浜辺を散歩したりする。マルバルとトレニッサン夫人が抱擁し合うのを、Keréol 荘の窓にはじめて見たのはパスカル氏だった。彼は教会へも姿を見せ、罪を打ち明けられる相手を求めているのか、急におしゃべりになる。次第に記憶が鮮明になる。一等車内での刺殺。札束でふくらんだ財布を強奪。列車をとび降りて逃走。沼で洗った血に染まった手。……今ではパスカル氏の唯一の願いは立派に生命を終えることである。彼は拾った新聞に自分が殺した相手の遺品が競売にされる記事を見る。すべてのものが自分を告発する声を上げているのだ。もう死よりほかに逃げ場が無い、罪でなく救いとして。自首はせずに岩にひそみながら死ぬ機会を求めるパスカル。しかし中々死ねないパスカル。そのうちに彼は夜中に岩礁の間にはさまった船を見つけ、Kerahuel の村人たちを起こす。パスカルは乗船者を救助しようと海にとび込む。海はパスカルを迎え入れ、その身体は波と岩に碎かれる。献身、勇気、狂気、それとも自殺？パスカル氏の最後を見とどけた人たちが疑問に思ううちに、船は——たまたま村長の愛人だったマリエットが乗っている——満潮に助けられて沖へ脱出

した。……

『海辺の分譲地』を興味深くするのに次のような人たちも一役買っている。

20歳のバリュシュは働かずにいつもぶらぶらしている。50歳のマル＝コモードは人から魔女のように忌み嫌われている。どちらも気が変なのだが、二人は恋人同士のように散歩する。女の姿が見えないと男が探しまわる。絵心のあるバリュシュは、紙が無くなると壁に落書きをし、胸をふくらませたマル＝コモードの絵を書く。そのうちに落書きのモデルが変わり、女は男の変心に気付く。トレニッサン夫人の下女カメリヤ宛ての、鳥の足に結びつけたバリュシュの恋文がマル＝コモードに見つけられる。バリュシュはラゲピーの家の番人を引き受け、主人が不在の間にカメリヤを連れ込んで逢瀬を楽しむ。女は姿見に自分の裸身を映し、大きなベッドに二人で寝る。帰って来たラゲピーは家じゅうを掃除させてから二人を追い出す。カメリヤは妊娠していてバリュシュの子供を産む。

彼女は自分ひとりで生まれたての子に洗礼の真似事をし、キリスト教徒にしておいてから兎を殺すように赤ん坊の背骨を折って殺す。クリスマスのミサから帰ったマルバルとトレニッサン夫人は、カメリヤが庭で穴を掘っているのを見る。子供の死体が村の女に発見されると、カメリヤがおなかが大きかったことは誰もが知っていたのに、人々はカメリヤを怪しまずにトレニッサン夫人を子供殺して訴える。検事、予審判事、憲兵が到着し、Keréol 荘で検証が行なわれる。夫人にかけられた疑いがすぐに晴れ、カメリヤが車で護送されることになる。彼女の持物がしらべられてその中からハートのエースが見つかる。このカードを引き当てた男が、数人の仲間同士で出し合った金で女が買えるルールなのだ。Kerahuel へ来る前のこんな前歴までが明るみに出る。カメリヤが遠くへ去り、バリュシュとマル＝コモードがまた以前の恋に戻った。……

幾つものエピソードのうちで最も真実味が感じられるのは、少年オリヴィエと少女ポーリーヌの愛の話であろう。

セーヌ県の役人ニクー氏は、屠殺場の庭で牛の角に突かれて目下 Kerahuel で静養中である。次は墓地係への配置換えが決まっている。彼は自分の手でコ

メデイも書き、娘ポーリーヌにバイオリンを弾かせている。オリヴィエは女性の滞在客の息子でスイス人女性が家庭教師につき、外国語を話すように教えられている。そんな二人が波打ち際で砂遊びをするうちに、ほのかな愛が芽生える。とりわけ、写真にうつったポーリーヌの悲しそうな顔にオリヴィエは心を奪われる。父親に仕込まれて芸人になったポーリーヌはどんな子役の主人公も演じ、*Comédienne* としても売出すようになるが、早くも老けた感じがして見える。或る日、私と一緒に遊んで下さらない？と言われたオリヴィエは、「自分が愛していた少女の恐ろしいほどの変わりようを目のあたりにして、もう一緒に遊びたいとは思わなかった。」言葉づかいや声の抑揚から、彼女がもう同じ人だとは思えなかった。「この遠ざかりゆく女友達の顔は、いつも見てきたあのポーリーヌの顔とどんなに痛ましいほど異なって見えたことだろう。アンリ・ハイネの詩の中のポーリーヌ、美しい夏の宵に月明りに照らされたばらの花の反射で、顔をばら色にした少女ポーリーヌとは！」ポーリーヌは更に、悲しそうにしていたのは、父親の指図通りに人気取りのためだったことも打ち明けた。この世の事柄がこれほどまで嘘だらけで、悲しみさえ誠意がないのを知らされたオリヴィエは、苦しむ必要のない死者を羨ましいと思うのだった。「現実世界の何物も、彼が学んでいる時に書物が目の前に開いてくれたあの美や詩の世界に似てはいなかった。どうすればいいのだろう？」彼はサン＝クルム礼拝堂で鐘の綱を首にまきつけてぶら下ったところを、家庭教師に見つかって助けられる。そんな事があってからもう一度、彼は駅でポーリーヌと顔を合わせる。彼女が人々に別れを告げているのを見て、その度の過ぎた感情のあらかし方にオリヴィエは怒りさえ覚えるのだ。オリヴィエにもお別れのキスを求めて、「彼女はオリヴィエの方へと、とても色あせた顔を、メーキャップが残る早熟な皺を差し出した。オリヴィエは顔をそらせた。——私たちはもう古くからのお友達じゃないの？——違うよ。君は心があんまり醜いんだから。君がこんなに醜くなるなんて僕は知らなかったよ。——今夜君は百歳に見えるよ。……僕は見すぎたよ。わかりすぎたよ。……」

自殺未遂事件には次のような後日談がある。

オリヴィエの命は救ったものの監督不行届だったために、家庭教師は自分も案じていた通りに解雇を言い渡された。そこで彼女は身のふり方を決めるためにヘアピンを抜いて旧約聖書の小口に差し込むと、ルツ記第3章が開けた。彼女は天啓のように、ボアズというのは浜辺でよく見かけるアマチュア写真家シャルレスコーのことだと思い、神はこの男の伴侶になれと命じられている、と解釈した。彼女はルツのように美しく装ってシャルレスコーに会いに行つて奉仕を申し出た。彼女と話している隙にあの事件が起こったのだから、シャルレスコーも彼女の解雇には責任を感じていた。そこで彼女にパリの家の中の管理を頼むことにした。写真の現像を手伝ってもらうことも。それからボアズとルツは、同じ列車の別々の車輦に乗って **Kerahuel** を発っていった。

☆ ☆ ☆

古くはトリスタンとイヅウの伝説の地、美しい海とピトレスクな衣裳の人々。1793年の反革命の戦場となり、今はワグナーの音楽で脚光を浴び、多くの人々を惹きつけるブルターニュ。しかし、マルバルたちの夢が破られるだけでなく、幻滅はさらに絶望へと悲しみの度合を深めてゆく。

医者で観察家のラゲピーが **Kerahuel** の精神と肉体について下す診断は決定的である。彼は「この地方全体が度し難い偏見に埋もれ、乗組員が曳航を断った船のように沈んでゆく」のを見た。そして飲酒、それは肉体を危機的状況に追い込んでいる。アルコール中毒の結果起こる病気のコレクションが出来るほどだ。「**Kerahuel** はアルコールで滅びる、と私は言うのです。……散歩をなさる時によくごらん下さい。頭脳や脚に障害があったり、てんかん性の、あるいは股関節痛にかかった沢山の子供たちを。彼らの両親と話してごらん下さい。すぐに彼らがすべての適確な判断も、すべての正しい理性の働きも欠けていることをお認めになるでしょう。……何度も言いますが、**Kerahuel** は滅びるでしょう。そしてブルターニュも一緒に。この村の欠陥は境界を越えて、遠く地方全体を汚染するのです。」

時代と所によって現れ方に違いはあるにせよ、精神の偽善と生理的欠陥は人間には永却不変の問題なのである。「トリスタンの城」の岩へと盲目的に走ってしまった」あやまちを悟ったマルバルとトレニッサン夫人は、午前一時に迎える馬車に乗って Kerahuel を離れた。二人は満天の星に眺め入った。「乳色のカペラ星（馭者座）、椅子に似ていると言われるカシオペア座、ひよこ籠という名のプレイヤード星座のひしめく光。大熊座の車の後車輪に明りのついたダイヤモンドの二本の車軸から7つの星を数えて、二人は北極星を探した。オリオン座、シリウス、木星、土星。天の川が目の届く限り霜のようにきらめいていた。マルバルとトレニッサン夫人は自分たちの読んだ本から、あの光り輝く世界、数え切れない世界も、大気と住人を持っているものと想像した。それらの世界も、心身の障害と欲望と悪徳を隠し持っている。……二人は途方もなく多数の野駑行為が頭上に宙吊りになっていることを思って身ぶるいがした。……おそらくあの高い所に、自分たちが立ち去った Kerahuel よりももっと悪い Kerahuel が、卑しさと愚かさで罪とで賑やかな Kerahuel がひしめいている。……空は光と清朗さの人をあざむく外見の蔭に、原初時代から邪悪と愚かさの深淵を転がしているのだ。」

Kerahuel 村を脱出しても、人間の置かれている状況は本質的には変わろう筈がない。マルバルは愛する女性の懐妊を喜べない。子供が生まれる、そのことは彼の心に重くのしかかる。身心ともに疲れ果てた中年男女の間に偶然に宿った子供に、どんな将来が期待出来るというのだろうか。一方ブルターニュでは、サナトリウムの病室から出る汚物の焼却がうまく行っていない。一体、科学とは、一つの勝利と引き換えにまた新たな困難を産み出す宿命を負っているものなのか。それのみか、人間の進歩・向上の努力を嘲笑するかのように、押し寄せる海は、サナトリウムはおろか Kerahuel 村そのものをかき消そうとしているのではなからうか。オリヴィエとポーリーヌの波打ち際の砂山のように。かくして人は、マルバル夫妻のように、センチメンタルな涙に暮れるほかはないのである。

☆ ☆ ☆

アンリ・セアールは1851年11月にBercyの近くに生まれた。父はそばの貨物駅の助役だった。彼が8歳の時、ナポレオンⅢ世がイタリヤ戦争から帰国して凱旋パレードが行われた。その数日前、父は「栄光とはどんなものか見せてやろう」と言って息子を貨物駅へ連れて行った。6週間の勝利のあとで、近衛騎兵はぼろぼろの服を着、馬は疲労困憊していた。ところがパレードは新しい軍服と元気澆刺たる馬で行われたのだった。この時の記憶は終生忘れられないものとなった。

普仏戦争の敗北、パリ攻囲、パリ・コミュンなどでの大きな精神的衝撃。1873年陸軍省に臨時職員として雇われ、中断期間もあるが1882年まで同省に勤務。ゾラとの出会いは1876年、本当に友情で結ばれるのは1880年頃からである。『エミール・ゾラへの未刊の手紙』にも見られるように、セアールは物心両面にわたってゾラの支えとなり、ゾラ作品を公平に批評し、ゾラに貸したクロード・ベルナールの『実験医学研究序説』はゾラの『実験小説論』を書くのに役立てられた。リセ時代にゴンクールを読んで文学に目ざめたセアールは言っているが、セアールの研究家は、ゴンクールやゾラよりも文学思想の観点ではフロベールに多くを負っていて、特にベシミズムはフロベール伝来のものだと言っている。

陸軍省を辞めたのち1883年にパリ市の司書補になり、1898年4月まで図書館勤務。退職してプルターニュに移り住む。「批評や文学の仕事でくたくたになり、公立図書館に知的な救いを見出すことも諦め、一人の通りがかりの者が、虐殺の思い出よりも広大な水平線への好みに惹かれて、隠退生活をしにキブロンくんだりまで来たのだった。」ところがセアールがそこに見出したのは、自分の夢と全く関わりのないことばかりだった。作品の主人公マルバルと同じように、“よそ者”が他人のために行動するとその態度を非難され、行動を抑えるとまた非難された。10年間半ば流謫のような暮らしをした後にパリへ

帰ったが、1906年以後はジャーナリストとしての活動はしていない。

さて、Kerahuél というのは、作中ではキャンペールから20キロ離れた所とされている。しかし、実際はキブロンPort-Haliquenで、頑固にブルターニュ的な所を舞台にして『海辺の分譲地』は書かれたと、『アンリ・セアール——目を覚ましたイデアリスト』でロナルド・フレジーは言っている。女の衣裳はヴェラスケスの絵に見られるように、胴を締めつけてゆったりしたスカートをはき、男は闘牛士を思わせる短い胴着とパンタロンを着用していた。ユイスマンス宛の手紙で、漁夫たちは稼ぎは多いのにそれを全部飲むのに使ってしまう、だからいつも貧乏だ、「あの悪徳の、腹黒い獣たちの前では吐気がする」と書いていることから、住民のモラルは相当低かったと察しられる。従ってこの作品はそのような田舎暮らしの見聞、観察、体験に基づいて、夢を託したブルターニュに対する *désillusion* の物語であるが、当時の思潮であり且つ長年セアールの内部に蓄積されてきた実証主義から決定論へ、そしてペシミスムへと向かう思想が、この作品に於て主導的役割をしていることは明らかである。

作者セアールの情緒面はマルバルに、思想面は殆どラゲピーに託されている。「私は伝説を破壊し、小説家や詩人の想像を正確な事実に取り換えています。勿論、私の意見がサロンの美しい婦人がたの前でピアノに合わせて歌われるのに、また、アカデミー・フランセーズからレアリスムの小説として授賞するのにも、適していないのを知らないのではないのです。私は抒情味に欠けていますが、そのことを私は誇りにしています。」こう語るラゲピーの他に、アマチュア写真家シャルレスコーも作者の思想を代弁している。「早撮り写真を発明した光学機器製造者は深遠な哲学者だったのでしょ。彼らはわれわれに持続を軽蔑することを教えました。……われわれの誤りは、対象を固定しようとしたり、対象が持ってもいないし、持つことも出来ない永続性を対象に与えようとするのが原因でないと、どうして言えるのでしょうか。」科学によれば万物は絶えず進化する。科学の目には、すべてのものはその恒常的な動性によってのみ自己の存在を示しているのだ。ところで写真術は、機材が進歩して、

路上の人も馬車も、勢よく煙を吐いて疾走する汽車も写せるようになった。つまり、動をとらえる早撮り写真と科学とは共通の認識に立っている、と言うのであろう。作家にとっても、過ぎゆくすべてのものが意味深くて看過されてはならない。だが、*instantané* という言葉が文学批評家に用いられるのはもっと後の事になる。

最後に、従来の小説の概念からはみ出ているように思える『海辺の分譲地』をどのように評価したらよいのだろうか。

自然主義理論によると、普通の人の日常的な出来事が小説にされるべきである。「ゾラ以上に自然主義者だった」(ピエール・コニイ)セアールは忠実に理論を実践した。前作『佳き一日』は、夫との単調な日々で退屈した妻がふとアヴァンチュール願望を起こし、同じ建物の真上の部屋に住む独身男に誘われてレストランの別室に入ったものの、気づまりな雰囲気、ちぐはぐな言葉のやりとりで終始し、雨にも降りこめられて、結局、夫と向き合うよりも退屈な時を過ぎた、という話である。何事も起こらない退屈な小説を、セアールは文体に工夫をこらして読めるものとした。『海辺の分譲地』でも、主人公の中年男女は理解し合い支え合って生きてゆくだけである。前作と同じでセアールは世の常の有り様を飾らずに書く。つまり、人生は期待と失望のくり返りで、華々しいドラマなど滅多に起こらないのだ。今度は単調な物語の舞台に作者は野生美豊かなブルターニュ海岸を選び、観光地の裏面、今日よく唱えられる村おこし・町おこし、普通よりも大きなウエイトを持つ幾つかのエピソードなどを配して、オムニバスの興味の多いものに仕上げた。その上、鉄道の発達によって運送が海から陸に移ってきた／周遊券 (*billet circulaire*) が発行されたので一ヶ所に客が長逗留しなくなった／無償の義務教育が始まって4分の1世紀が経つのに地方選挙の実態が改まっていない、などに作者の *sociologique* な視線が感じとれる。また、駅での入れ換え、発車、走行中と、汽車が度々背景の絵のように描かれているのも印象深い。

セアールはこの作品に自分が持てるものをすべて投入したのであろう。しかし、またピエール・コニイによると、「全体に生氣を与える真の才能の指の一

はじきが欠けている。」そこがゾラのような一流作家とセアールの差なのである。ゾラに於いては創造力が強くて、しばしば自然主義作家が現実をふみ切り板にして宙へ跳躍している。セアールに於いては、芸術家よりも観察家、分析家、思想家が優っていて作家セアールが地上を離れることは無い。ゾラのように楽天主でなく、科学志向は強いがゾラのように科学を盲信することもない。病室の汚物の処理問題を取り上げて、セアールは早々と科学に対して注意信号をともしている。

Kerahuel というのは、三つのブルトン語の語源 *ker=village, bour ou petite ville, a=de ou vers, huel=haut* から成る象徴的な語だという。(フレジャー) 思うに人間はすべてなんらかの形で上昇することを望んでいる。だから、われわれみんなが Kerahuel の住人なのである。村おこしも合理主義精神も科学もそのために大いに必要とされるが、つまるところそれらも、ろう付けされたイカロスの翼にすぎないのではなからうか。『海辺の分譲地』のセアールはそのような主張をしているように思える。『佳き一日』と異なり、今日では自然主義研究者にもひもとかれることは稀であろうが、失望せる実証主義者の証言として、忘却の彼方に押しやられるには誠に惜しい作品だと言わねばならない。

使用した文献

- Henry Céard : *Terrains à vendre au bord de la mer*, Paris Fasquelle, 1906
Henry Céard : *Une belle Journée*, Slatkine Reprints, 1970
Henry Céard : *Lettres inédites à Emile Zola*, Nizet, 1958
Ronald Frazee : *Henry Céard, idéaliste détrompé*, PUF, 1963
Pierre Cogne : *Le Naturalisme*, PUF, 1953
Jacques Dubois : *Romanciers français de l'instantané au XIX^e siècle*, Bruxelles, Palais des Académies, 1963
Emile Zola : *Zola photographe*, Denoël, 1979